

特集3

## デザインする街—7

水と緑の回廊計画「学びの森」  
〈岐阜県各務原市〉

岐阜県各務原市は、日本初の公園都市・パークシティを目指している。2001年3月、その実現のための都市戦略として策定したのが「水と緑の回廊計画」(緑の基本計画)である。市民と行政がまちづくりのビジョンを共有することからスタートしたこの計画は、当面の目標を2020年に据え、じっくり取り組んでいる。2007年11月3日にグランドオープンした「学びの森」は、その拠点づくりの一つである。この地は、多くの大木が残る岐阜大学付属農場だったが、跡地開発を巡ってさまざまな開発計画が二転三転し、都市計画道路案まで出た。これを機に市民から“緑の保存と公園計画”の強い要望が挙がり、ついには“都心の森”として整備されることが決まった。以後、市民による森を守り育てる活動、環境学習やイベントなど、市民が積極的に参加した公園づくりが展開されている。市民・行政が一体となった、都市再生型のまちづくりの手法を探った。

# 水と緑の回廊計画

森 真  
SHIN MORI

「特集3」 デザインする街 7

戦後の国土の荒廃から立ち直るため、日本は経済成長を中心とする豊かさを追求し、現在ものがあふれるほど物質的な面では豊かになったといえます。しかし、少子高齢化や、環境の悪化、更には昭和4、50年代にベッドタウンとして人口が急増した当市の団塊の世代が、今後、大量に定年退職を迎え、市内で過ごす時間が増えることなどを考慮しますと、これからの都市に求められるのは、生活の豊かさを実感できる魅力あるまちです。

そこで、各務原市は平成12年（2000）3月、各務原市の将来の都市像として、「人が元気、まちが元気、産業が元気」な「おしゃれでアクティブ＝快適産業都市」、「元気な各務原市」を基本理念とした5つの重点目標と10の都市戦略を定めました。ここでは、各務原市の独自性を創造し、市民が誇りを持って住むことのできる「個性が輝く都市づくり」をその重点目標の一つとし、単に人口規模の拡大を追求したり、巨大な人工構造物に取り囲まれた都市ではなく、人々の目線に合う、生活の質が高い芸術・文化都市、あふれる緑に包まれた「おしゃれで美しいまち」づくりをうた

っています。「環境と共生した都市づくり」は、その基盤となるもので、豊かな緑と水辺空間など、各務原市の特性を活かした「緑の回廊」、すなわち川・公園・街路樹などによる「緑のネットワーク」を形成し、現在はもちろん、次世代の市民も豊かで快適に生活できる、環境に優しい都市を目指しています。こうした重点目標を実現するために、平成12年度、「水と緑の回廊計画」という各務原市緑の基本計画を定めました。

「水と緑の回廊計画」とは、各務原市の特性を活かし、北部の山地を「山の回廊」、市内を流れる境川、新境川、大安寺川、および市の南部を流れる木曾川を「川の回廊」、まちなかの緑を「まちなかの回廊」として整備し、水と緑の回廊、すなわちネットワークをつくり出すという壮大で遠大な計画です。

回廊とは、平たくいえば点と点をつなぐことを意味します。つまり、「あそこに公園がある、ここにも公園がある」、というのは緑に至るところに点在しているだけの状態です。その公園と公園を結ぶ歩道や水路、河川を生物の住むことのできる場とし、街路樹のある沿線の住宅や事務所・工場などの庭が緑

もり・しん—岐阜県各務原市長／1940年生まれ。早稲田大学第一法学部卒業。衆議院議員秘書を経て、1979年、岐阜県議会議員に初当選。以降18年務めた後、1997年、各務原市長に就任、現在3期目。  
主な著書：『エメラルドネックレス 21世紀都市戦略』（岐阜新聞社 2000）、『ドラマシティー 21世紀都市戦略2』（岐阜新聞社 2004）。

であふれている、歩いて楽しい空間にしていくことが回廊づくりです。そしてその究極の目標は「公園都市」です。

水と緑にあふれた美しいまちづくりは、単に市内にたくさん公園をつくり、植林をすればいいというものではなく、計画に基づいて行うべきものです。「水と緑の回廊計画」では、その理念の実現を目指し、各務原市の今後の緑のあるべき姿を示した「7つの拠点計画」や、緑の保全・整備・育成にかかわる施策を重点的に推進し、まちづくりにおける先導的な役割を担う7つの「緑化重点地区」を定めました。また、こうした計画を実現していくため、「水と緑の保全・整備・育成」の3つの柱と50の施策を制定しました。

さて、かつての「学びの森」は、大正12年（1923）に開校した岐阜高等農林学校が、昭和24年（1949）に岐阜大学となり、昭和57年（1982）に農学部が移転したために残された、都心の広大なオープンスペースでした。

平成12年度に策定した「水と緑の回廊計画」では、ここを近隣の市民公園と一体として利用できる市民の中心的な憩いの場となるセントラルパークとし

て整備することが位置づけられました。

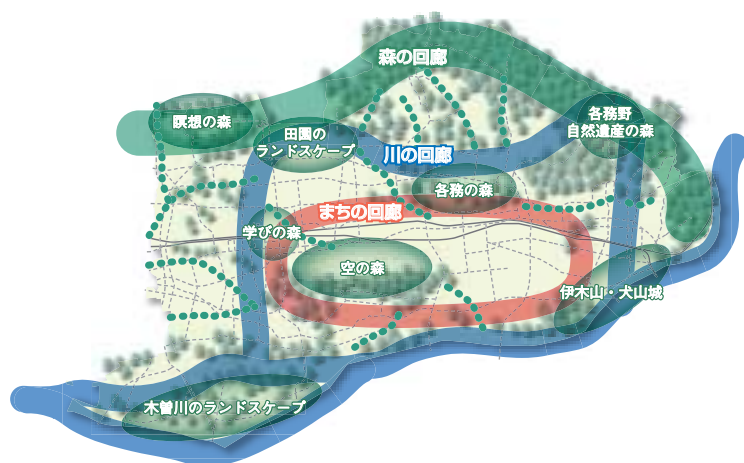
平成17年（2005）9月10日、4haの整備をし、「学びの森」として開園しました。岐阜大学付属農場時代に植栽され、大きく育った樹木や地形を活かし、芝生広場や散策路、池を配置した緑豊かで、来園者が安心してくつろぐことのできる、景観に配慮した公園となりました。

「学びの森」の名称は、市民からの公募により決定しました。選定には、岐阜大学付属農場跡地という教育の場であった歴史と、近くに県立高校、中学校、小学校、養護学校などがある文教ゾーンであること、また、平成18年（2006）4月には中部学院大学が開校するなど、過去から現在、未来への「学び」の継承が考慮され、決定しました。

平成18年から19年（2007）にかけ、1.8haを追加整備し、平成19年11月3日、公園面積5.8haの都心の森としてグランドオープンしました。新たに整備した所では、300人余りの市民ボランティアによる記念植樹が行われました。その苗木は、「市民の森を育てる会」が各務原市に自生する樹木のドングリから育てたものです。今後このグループが中心になり、都心の新たな森づくりが行われようとしています。

本当のまちづくりは、市民が行政と共通の都市ビジョンを持つことにより、始まります。各務原市「水と緑の回廊計画」推進の大きな原動力は、こうした市民の参加です。市民が積極的に公園都市づくりにかかわる取り組みは、平成17年度国土交通省主催、財団法人都市緑化基金の「緑の都市賞」で、内閣総理大臣賞という最高の栄誉に浴する結果となりました。今後も市民と行政の協働により、理想の公園都市づくりに向けて計画を推進していきます。\*

KAGAMIGAHAARA



左—緑の将来像 3つの回廊・7つの拠点  
右—「学びの森」周辺パークシステム図



上—「牧場」（まきば）  
下—「原っぱ」 広々としたピスタラインを有する原っぱは、林縁および近・中距離景として既存の樹林を保全することによりつくり出された。これらの樹林は、階層的な生態系の構造（地被・草本・中木・高木層）を、まるごと保全する方針とし、野鳥や小動物の格好の生息地となっている

「学びの森」案内板 伸びやかな景観を訪れた市民が共感できるよう、背後の景色が透けて見える強化ガラスに園名が記されている



# 人口減少時代の新しいまちづくり

## 「学びの森」の全体構想とランドスケープデザイン

石川幹子  
MIKIKO ISHIKAWA

### 青い鳥は、ここにいる

今、日本の多くの都市で中心市街地の衰退が問題となっています。シャッターの下りた商店街、月極め駐車場は、いまや典型的なまちなかの風景であり、再生の成功事例として取り上げられるのは歴史的遺産を有しているなど、数少ない都市に限られているという現実があります。

ここで紹介する岐阜県各務原市は、名古屋大都市圏の都市として、1960年代以降、急速な成長を遂げ、住宅団地の建設、土砂採取による山並みの変容、地下水の枯渇と汚染など、郊外問題の縮図ともいえる都市であったといっても過言ではありません。

その象徴ともいえるものが、中心にあった岐阜大学付属農場跡地（現在の



上—メタセコイア並木 4列の並木の中央部。公園内を通る車道のため、減速と景観に配慮し、小舗石による「青海波」パターンの舗装としている。青海波の曲率は大正年間の事例を採用し、時代的考証を踏まえて決定された  
下—イチョウ並木 冬の風物詩となったイルミネーション

「学びの森」) でした。大正年間に岐阜高等農林学校として開設され、まちとともに歩んできた当該地区は、移転により有刺鉄線が張り巡らされた空き地となり、草に埋もれていました。開発が計画され、都市計画街路が敷地中央を分断するルートで決定されていました。何かが、おかしいのではないかと。納得しかねる疑問が、行政、市民にありました。どのように一歩を踏み出したらよいのか—。それが見えないのが、8年前の状況だったと思います。

その中で異彩を放っていたのが、岐阜高等農林学校以来、継承されてきた多くの巨樹でした。明治期に輸入されたユリノキは、30mを超える巨木となり、圧倒的存在感を有していました。アブラギリは、初夏には林床を白紅色に染め上げていました。まちの真ん中に、この森を残すことができないか、“ここに私たちの青い鳥がいるはず”、という市民の思いから、このプロジェクトはスタートしました。1999年のことです。

### 「百年の計画」と、今の実践

縁あって、このプロジェクトをお手伝いすることになった筆者は、迂遠とも思える「百年の計画」をまず立てることが大事と考えました。これは、世界各地の都市を調査する中で得た学術研究の成果であり、美しいまちは100年の歳月に耐え得るビジョンを有するという確信がありました。この課題は、以下の5つの要素が緊密に支え合うことにより実現が可能となりました。強力なリーダー（市長）の存在、法に基づき「水と緑の回廊計画」をつくったこと、計画策定のプロセスに市民参加を導入したこと、明確な行動計画をつくったこと、健全な財政計画に基づいて柔軟に事業の調整を行ったことです。

いしかわ・みきこ—東京大学大学院工学系研究科 教授 / 東京大学農学部卒業。ハーバード大学デザイン学部大学院ランドスケープ・アーキテクチャー学科修了。東京大学大学院農学系研究科博士課程修了。技術士（都市および地方計画）、農学博士、日本学術会議会員。  
主な作品：マドリッド市水の公園（2003）、各務野自然遺産の森（2005）、瞑想の森（2006）、ハン河中央公園（2007）など。  
主な著書：『都市と緑地』（岩波書店 2001）、『流域圏プランニングの時代』（共編、技法堂出版 2005）など。

### ひとつずつ、着実に

それでは、実際にはどのようにして「学びの森」が作り出されいったのか、時間を追って紹介します。

#### ・場の持つ歴史を大事にする

「学びの森」づくりは、市民の皆さんによる毎木調査から始まりました。ワークショップが開催され、2001年に策定された「水と緑の回廊計画」で、セントラルパークとすることが決定、<sup>まきば</sup>牧場のような伸びやかな景観を大切にするという合意が形成されました。「学びの森」という名称は、後に市民公募により名付けられたものです。

#### ・古い公共施設のコンバージョン

整備は、まず、耐震補強工事が必要とされていた「那加福祉センター」の改修からスタートしました。特色は、単に建築の改修ではなく、ランドスケープと一体となった整備を行ったことであり、ピオトープ池、葉草園、ユリノキの保存など、埋もれた景観資源を掘り起こし、建築計画と連動して進められました。程なく、小さな池には、溪流に住むセグロセキレイが飛来するようになりました。また、丘の麓にある「各務原養護学校」も、森と連続する学校として垣根を取り払って整備され、段丘崖の竹林の再生活動がボランティアの皆さんの活動により始まりました。

#### ・美しい並木道をつくる

次に行ったのが、美しい並木道をつくることでした。ゆったりとした並木道を家族と歩くことは、ささやかではありますが、なかなか難しいことです。なぜなら、日本のまちには美しい並木道が数えるほどしかないからです。外周にあるイチョウ、メタセコイアの大木に補植をして作り出されたのが、“学びの森プロムナード”です。4列の並木のうち、歩道は歩きやすい土系舗

装、中央部の車道は速度を落とし品格を高めるために、御影の小舗石による青海波としました。

#### ・ビスタラインの創出

伸びやかな景観を生み出すために、基本としたランドスケープデザインが、ビスタラインの創出です。これは、イギリスにおける自然風景式庭園の基本的構造として、古くから適用されてきたものです。日本では、明治期に新宿植物御苑に適用され、その後、明治神宮内苑の宝物殿前に適用された後、絶えて事例はありませんでした。これが、ほぼ100年ぶりの3番目の事例となりました。ビスタラインの設定に当たっては、視点場を定め、遠近感を増幅するために近距離景・中距離景・遠距離景を決定し、水景を挿入しながら慎重に施工が行われました。ビスタの終点は、“陽だまりの丘”と名付けられた緩やかな丘であり、約6年の歳月をかけ整備が進められました。竣工は2007年11月、市民の皆さんが現地でドングリから育ててきた苗木が植栽され、“100年の森づくり”がスタートしました。

#### ・伸び伸びと子どもが遊ぶことのできる場の創造

「学びの森」の最も大切なランドスケープデザインは、子どもたちが伸び伸びと遊ぶ空間をつくり出すことです。どこまでも続く芝原、牛が放牧されていたすり鉢状の牧草地は、“<sup>まきば</sup>牧場”として草スキーの格好の遊び場となっています。ビスタの中距離景として作り出された池は水深を浅くし、幼児でも安全に水遊びができる形態としました。

#### ・庭園駐車場

地方都市にとって不可欠である駐車場は、緑化を重点的に行った結果、市民の方から「庭園のようだ」という感想を頂き、“庭園駐車場”と名付けられました。

### 未来への先導

「学びの森」の整備が進展するにつれて、周辺に少しずつ変化が起きてきました。なかでも、大きな変化は隣接地に大学が開設されたことです。まちに大学が存在することは、文化、活性化の面から極めて重要であり、社会人教育、児童教育のプログラムを有する中部学院大学が建設されたことは、画期的な出来事となりました。

人口減少の時代を迎え、まちなかをいかに再生させるかは大きな課題です。コンパクトシティとして密度を上げていくという考え方もありますが、地方都市ならではの、ゆとりを活用し、詰め込まない空間により、人間本来の創造性を誘発していくという視点は、一つの選択肢として熟慮する価値がある試みです。

各務原市は、「水と緑の回廊計画」に基づき、「各務野自然遺産の森」、「星の森」、「瞑想の森 市営斎場」など、拠点を整備し、生命の回廊で結ぶ「百年の計画」を持続的に行っています。日本の地方都市に、海外からも学生がリュ



原っぱ

ックを背負い、訪れるようになりました。まちの人々にとって、誇ることのできるうれしい出来事です。\*



「学びの森」配置図

# 「雲のテラス」と「多目的レストルーム」

小林正美  
MASAMI KOBAYASHI

「特集3」 デザインする街 7

「雲のテラス」と「多目的レストルーム」はともに、「学びの森」という広大な緑地公園の中に計画された市民のための施設です。一般に、建築は人工的な構築物であるために、有機的な自然形態とは融合しにくい幾何学的形態が多く使われ、その存在が景観全体に与える影響が大きいといわれています。しかし、一方で人々の新しいアクティビティーを導き、新たな“場”を創造

するということも建築の果たす重要な役割です。

今回の計画では、これらの慎重なバランスを図るために、建物のスケール、配置、素材、空間構成などについて、徹底的にランドスケープデザインとの対話を重視し、何回も模型や景観のシミュレーションによるフィードバックを繰り返すことで、最適な解を探るというプロセスを経ることにしました。

こばやし・まさみ—建築家/1954年生まれ。1977年、東京大学工学部建築学科卒業。1979年、同大学院修士課程修了。1979～85年、丹下健三・都市建築設計研究所勤務。1988年、フルブライト奨学金によりハーバード大学大学院修士課程修了。1989年、東京大学大学院博士課程修了。2002年、ハーバード大学客員教授。2007年、カリフォルニア大学バークレイ校客員研究員。現在、明治大学理工学部教授、アルキメディア設計研究所主宰。主な作品：明治大学生田ゲストハウス（1998）、国際文化会館本館保存再生（2006）など。

その成果を自分で評価することは難しいのですが、公園開き以来、多くの来訪者がこれらの施設を利用し、市民からは大変愛されているという報告を伺い、心からうれしく思っています。

### 建物スケールの検討

#### 2層家から平屋・分散型家へ

この施設を設計するに当たり、当初、市から与えられた用途のプログラムは、公園管理用の倉庫と事務所、多目的トイレ、市民ギャラリー、カフェテラスなどでした。計画の初期段階に、これらをできるだけコンパクトなボリュームとして試算すると、どうしても建物全体を2層構成とし、1層目に公園管理機能とトイレ、2層目に市民ギャラリーとカフェテラスを配置するのが最も合理的であることが分かりました。しかし、バリアフリーのためには、エレベーターや長大なランプを設置しなければならず、模型による検討では公園全体に対し建物のスケールがあまりに大きすぎて、景観に与える影響が多であることが判明しました。そのため、半地下をつくる案や、すべて平屋建てにする案も代替案として検討しましたが、結局どれも総合的な解とはなり得ませんでした。最終的には市の担当者に無理なお願いをし、全体を別棟の施設に分け、建設時期をずらし、「雲のテラス」（公園管理事務所＋市民ギャラリー＋カフェテラス）と「多目的レストルーム」（トイレ＋公園管理用倉庫）を、それぞれ平屋建てとして分散して建設することで、建物スケールを軽減する問題を解決したのです。

### 「雲のテラス」の建築デザイン

「雲のテラス」の建築デザインを考える際に、まず最初に設定したテーマは、「学びの森」全体のランドスケープ

が持つおらかでゆったりした空間の中で、いかに人々が都会の喧騒から離れ、リラックスしながら大自然の持つリズムを体感し、アートや文化に触れることができる空間をつくり出すかということでした。まだ木々が鬱蒼とし、公園としてのかたちが整う前に、市長を始め、多くの関係者たちと敷地を歩き回りながら、大体の建築予定地を確認し、具体的な空間構成のイメージを以下のようにつかむことができました。①公園の主軸を成すイチョウの並木を建物の背景とし、新しくデザインされる大きな池に向かって、優しいまなざしを投げかけることのできる透明な空間を提供すること。

②公園に計画される小川や池などの水空間と建物が、うまく対話できるような新たな親水空間をつくり出すこと。

③建物の要素を大きく2つの性格に分け、市民の自主的活動の発表の場として絵画やアートを互いに鑑賞することのできる“市民ギャラリー”空間のために、比較的閉鎖性の強い空間を提供すること。また、大人たちが子どもたちの遊びを身近に感じながらゆっくり休憩できる“カフェテラス”空間のために、半外部的な開放的空間を提供すること。

④重要な機能である公園の管理事務所を周辺全体が見渡せる場所に設置すること、などです。

最終的な空間構成としては、地を水平に伸ばし、市民のための屋内外の展示ギャラリーを挟み込み、その上に雲が舞い降りたような軽快な屋根を配するという構成に落ち着きました。そうすることで曖昧な中間領域を生み出し、広大な公園のスケールに合った開放的なカフェテラス空間をつくり出すことができました。ここでは、市内の他の施設で



上—雲のテラス 緑の海原に、ぼっかりと浮かぶ雲をイメージしたカフェテラス  
下—多目的レストルーム 背後にそびえるトウカエテの美しい樹形と呼吸している

も使われている地元産の石材を採用し、関係性を重視するために「多目的レストルーム」でも共通の素材を採用しています。また、厚さ70mmの薄いステイールハニカムによる大きな屋根を、できるだけ軽く見せるために多くのスリットを開け、柱の数も最小となるように構造設計者と検討を重ねました。市民ギャラリーの屋根部分や壁にも多くのスリットを設け、太陽光や視線の遊びを取り込もうとしています。カフェテラス空間では、ガラスの建具を全部開放することで大きな縁側のような中間領域を生み出し、新しくデザインされた池からの涼風を感じながら、市民の人々がリラックスできるような工夫が施されています。多くの人々がここで無為な時間を過ごし、自分自身が環境の一部として自然の中に抱かれるような感覚を味わっていただきたいと思っています。

### 「多目的レストルーム」の建築デザイン

「多目的レストルーム」の建築デザインでは、一般に“公園のトイレは不潔で怖い”という常識を覆すために、

公園内における明るく清潔なトイレ空間の在り方を追求しました。そのために、透明と乳白色のガラスによるダブルスキンの外皮表現を採用することにし、表層を形成する2枚のガラス面には、細長いシルエット状の植栽パターンをプリントして、建物の前を歩くと不思議な奥行き感とざわめき感が感じられるような効果を考えています。昼間は乳白色のスクリーンに木々の小枝の影が落ち、室内にいても公園の明るい気配が感じられ、夜間には発光する光のオブジェとして建物自体が周囲を安全に照らし、まさしく夜の公園における灯台のような役割を果たしています。入り口部分には、再生ガラスによるトップライトを採用し、趣のある光が足を照らすことを意図しました。全体的には、単なる閉じたレストルームではなく、公園のランドスケープデザインと対話する明るい施設を実現することができたと思っています。

今後、このような施設のメンテナンスは特に重要なので、市民の人々に大事に使われるような清潔な施設であり続けてほしいと願っています。★



さざなみの池と小川

# 「学びの森」は市民と学生の交流の場

今井春昭  
HARUAKI IMAI

「特集3」 デザインする街 7

## 「学びの森」に隣接する大学

中部学院大学・中部学院大学短期大学部には2つのキャンパスがあります。岐阜県関市にある関キャンパスと、各務原市にある各務原キャンパスです。

各務原キャンパスは2006年4月、各務原市の中央部に位置する「学びの森」に隣接して開設されました。開設当時は「人間福祉学部子ども福祉学科」と「短期大学部経営情報学科」の2学科でスタートしましたが、前者は2007年4月に「子ども学部子ども学科」として改組され、後者は2008年4月に4年制の「経営学部経営学科」として再スタートする予定になっています。

各務原キャンパスは関キャンパスからおよそ8km南西に位置しています。距離のある各務原市に大学を設置した目的の一つは、“地学連携”の具現があります。インフラ整備に不便さを感じることもあり、より充実した環境を求めていたところ、各務原市から大学誘致のお誘いを頂きました。各務原市に大学を設置することは、関キャンパスとは違う意味でのさまざまな可能性をもたらしてくれます。多くの地域住民が集まりやすい「学びの森」に隣接して大学を設置することは、地学連携を

進める上で大切な基盤であると確信しています。

## 地学連携を進める大学

現在、各務原キャンパスには2つの学科の他に、「各務原シティカレッジ」、「ラ・ルーラ（子ども家庭支援センター）」という2つの施設があります。

「各務原シティカレッジ」は、各務原市と中部学院大学・中部学院大学短期大学部と一緒に「地域・産業と学校の連携」、「知の教育」、「ネットワークの構築」を進めています。本学の先生方はいうに及ばず、各分野の専門の方々に講師にお招きし、多くの地域の方々に受講していただいています。昨年は、主催講座の受講生が3,000人弱に達しました。今年も主講座の他に、各務原市と実行委員会を設置し、「各務原シティカレッジ特別講演会」を開催するなどして、地域との連携を一層強めています。

「ラ・ルーラ」は、保護者が子どもとともに活動したり、地域で生活する子どもやその保護者、子育て支援の専門機関にかかわる人々が、互いに交流できるような“共育機能”を併せ持つ場として活動しています。昨年度の利用者は、およそ

4,300人でした。子ども、家庭に対する支援や、次代の子どもが健やかに生まれ、育成されるための社会的環境の整備が強く求められていますが、そうした要求に応え、地域の中の大学の重要な機能の一つとして活動を展開していくこと

いまい・はるあき—中部学院大学 各務原事務部長／1942年生まれ。金沢大学教育学部卒業。1965年、岐阜県立高等学校教員。1987年、県教育委員会事務局。1992年、県立白川高等学校校長。1994年、県教育委員会文化課長。1996年、同指導部長。1997年、県立岐阜商業高校校長。県立加納高等学校校長を経て、2003年から現職。

が大切だと考えております。

## 「学びの森フェスティバル」と大学

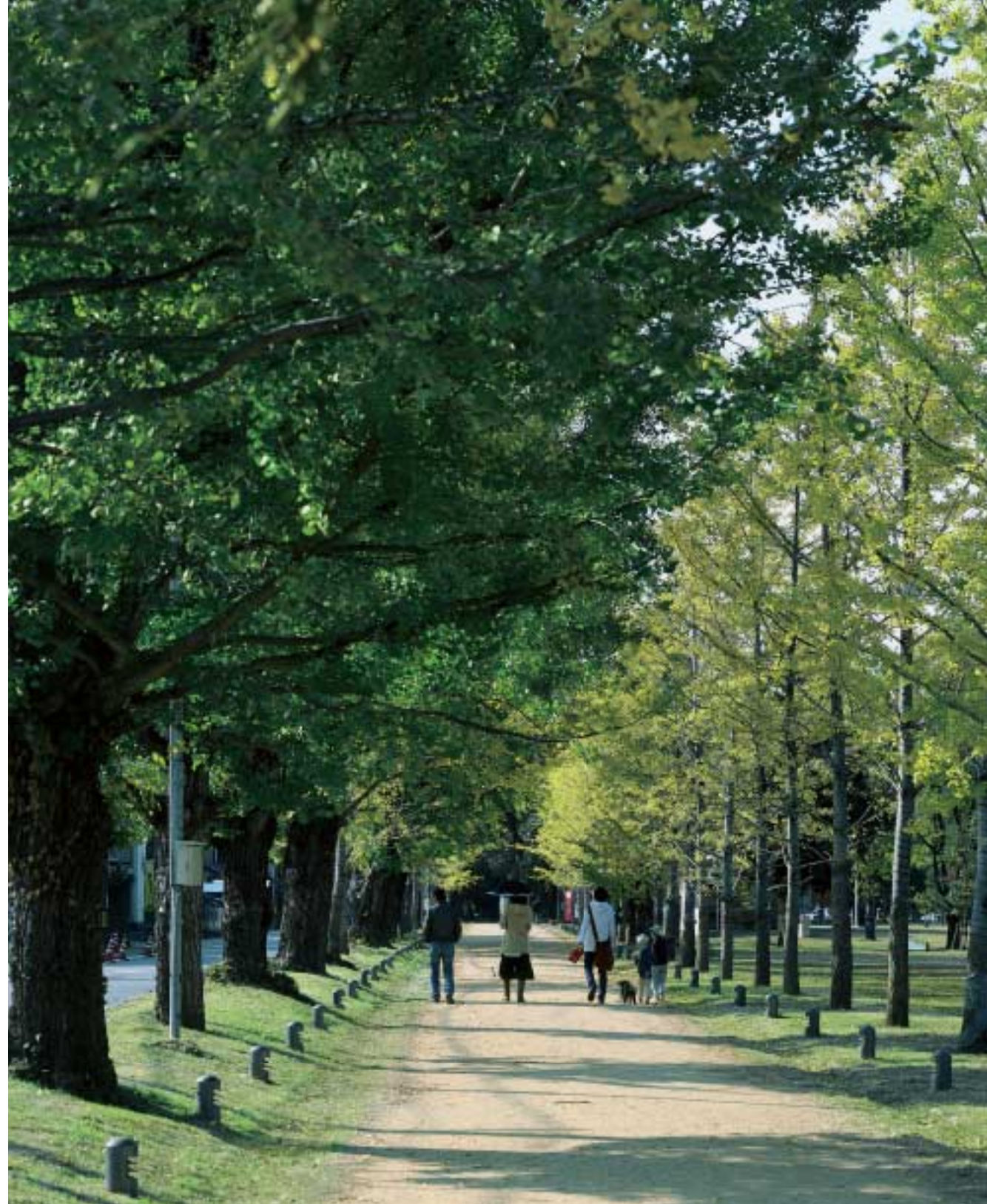
各務原市は、「学びの森」の整備を記念して、2007年11月3日（文化の日）、その式典を行うとともに、中部学院大学・中部学院大学短期大学部と共催して、「学びの森フェスティバル」を開催しました。

各務原市がさまざまな分野で、住みやすく快適な空間・環境づくりに邁進し、世界中から注目されていることはよく知られています。この事業もその一環ですが、ここに「若い力」の典型といえる中部学院大学生の積極的な参加、「各務原シティカレッジ」、「ラ・ルーラ」、市内小・中・高等学校、県芸術文化会議など多くの団体の参加を得ました。そして、小さな子どもさんからお年寄りまで楽しんでいただける、文化の日にふさわしい“市民のお祭り”を各務原市とともに作り上げることができました。

当日は好天にも恵まれ、多くの市民の方にご参加いただき、大盛況・好評のうちに終了することができました。

## 森は懸け橋

「学びの森」と大学は隣接しており、学生たちは「学びの森」を、日常の学習や生活の場として利用しています。一般に開放されている森（公園）ですので、学生と市民の方々との憩いや交流のスペースになっています。こうした触れ合いを通じ、大学も地域の一員として、地域を盛り上げていければと考えております。「学びの森」は、地域の方々と大学をつなぐ懸け橋です。これからも、森と大学が共生する環境をつくり上げていきたいと考えています。\*



学びの森プロムナード 岐阜高等農林学校開設時から年輪を刻んできた、樹齢100年に近いイチョウの大木を保存している。片側には新しいイチョウを補植し、堂々とした並木道が作り出されている。並木のそばに開放的な公園が広がっているため、伸び伸びとした雰囲気空間となっている

左—「すす風の小径」から「各務原養護学校」を見る。各務原台地段丘崖の斜面林を保全して水の道をつくり、生物多様性を育む場となっている。学校との間の柵を取り払い、公園そのものが学校の庭となる開放的構成となっている

右—那加福祉センター 大正年間に植栽されたコリノキの大木と、手前にはビオトープ池



「学びの森フェスティバル」の様子 中部学院大学のDolce (ドルチェ)のメンバーによる吹奏楽演奏

# 「学びの森」を育てる

後藤幸子  
SACHIKO GOTO

「特集3」 デザインする街 7

「学びの森」は2007年11月3日、紅葉のシーズンにグランドオープンしました。遠くに金華山を望むことができるこの公園は、木枯らしに舞う木の葉の中、通学する小中学生や散歩の人が行き交っています。

この岐阜大学付属農場跡地は、1923年に岐阜高等農林学校として開校し、1982年、岐阜市への移転により59年の歴史を閉じました。農場内や隣接する植物園には、珍しい木々が木となり、今では市民の緑の財産となっています。これらの木々は、農林学校に入学した学生が出身地の木を植えたものといわれています。

農場には、牛が放牧され、ヤギ、豚、鶏などの家畜が飼育されていました。小学生が遠足に訪れたり、写生大会が開かれたり、近くの子どもの遊び場にもなっていました。牛乳、卵、野菜、果物などを購入する場でもありました。各世代の人たちが多くの思い出を持つ場所でした。

移転して10余年の間は、年に数回の草刈りの管理のみでしたが、4月には原っぱ一面に黄色のじゅうたんを敷き詰

めたようにニホンタンポポが群生し、ツクシが顔を出し、ネジリバナが咲き、四季折々の植物が見られました。

キジがケーンケーンと鳴き、フクロウがいて、カワセミが崖に営巣し、子育てをしていました。草はらではヒバリも子育てをし、オオタカが時に飛来し、ツバメも人とぶつかるほどに飛び、多様な生物を育む場所でありました。

緑に恵まれ、自然が豊かだと思われた当市も、開発と宅地化などで急速に自然が失われ、子どもたちも自然の中で遊ぶことがなくなりつつあります。

そんな時に、市の公園計画が発表され、とても喜びました。そこでこの公園を“芝生広場より原っぱを”、“水系のない所に池をつくるのではなく、地域本来の自然を大切に”と考え、市にさまざまな働き掛けをする中、「市民の森を育てる会」を発足することになりました。

地球温暖化の危機が人類を脅かしています。「新・生物多様性国家戦略」が公表され、環境教育の推進を図る法律ができました。これらを“絵にかいた餅”にしないためにも、市民もかかわ

ごとう・さちこ—市民の森を育てる会 副会長／岐阜大学付属農場近くに37年在住。主婦。日本自然保護協会自然観察指導員。

っていかなければと思います。

「市民の森を育てる会」では次のことを目指し、さまざまな活動を市のパークレンジャーとして、市の協力を得ながら行っています。

①各務原の自然をよく見、よく知り、大切にする輪を広げましょう。

「学びの森」での月1回の自然観察会をしています。

②岐阜大学付属農場跡地の生態系豊かな原っぱを守りましょう。

落ち葉をゴミにしないで、土に戻すことをしています。微生物により分解され、土に溶け込み木の栄養となり、そして土の保水力を高めるためです。

③カワセミ、ヒバリが再び営巣し、子育てのできる環境をつくりましょう。

専門家の話を聞き、カワセミの崖の周りに人が立ち入らないようにするため市に要請したところ、柵を立て、周りに植栽を施してくれました。「市民の森を育てる会」でも、50人余りの参加者とともに100本余りの植樹を行いました。

④里山の木、ドングリなどの森をつくりましょう。

2003年8月、農場跡地に市内の里山のドングリなどの実を植え、苗木を育て、公園完成式には300人余りの参加者の手で公園内に移植しました。

⑤子どもたちが自然に親しみ、触れ合



左—「市民の森を育てる会」活動風景 植樹のために苗畑で育てたドングリの木を掘り起こしている様子  
右—「学びの森」グランドオープンの記念植樹 ドングリの森づくりのために、多くの人々が参加した



牧場 岐阜高等農林学校時代から継承されてきた、すり鉢状の放牧場をそのまま保全し、小動物の生息地を守っている。背後の森は、カワセミの営巣地。段丘崖の特色を活かし、ピオトープ池、せせらぎを整備し、生物多様性の維持・向上を行った



左—伸びやかなビスタラインと夕日  
上—「櫻坂」から牧場を見る  
右—「学びの森」中央部に位置する、さざなみ。公園を渡る風の道になっており、水面に揺れるさざなみが光と戯れている。イチヨウの大木が深い影を落とし、樹下に人々が憩う。「さざなみ」という池の名称は、風に揺れる情景を見て、市民が名付けたもの



う場にしましょう。

カブトムシやクワガタがいました。落ち葉を堆肥化し、カブトムシのお宿づくりをしています。毎年秋のイベントでは、ドングリなどの木の実を使って、トトロ、やじろべえなど、その子ならではの作品づくりをしています。

岐阜大学が市民に残した緑の遺産を大切に、増やし、次世代に引き継ぐことのできるよう、楽しみながら活動したいと思っています。\*